

# 海保眞夫教授 業績・略歴

## 著 書

1. 『文学』（共著）慶應通信 1976年3月 128-44, 176-86, 199-221頁
2. 『近代英文学の一面』（共著）慶應通信 1979年3月 9-101頁
3. 『続近代英文学の一面』（共著）慶應通信 1992年7月 3-112頁
4. 『イギリスの大貴族』平凡社 1999年10月
5. 『文人たちのイギリス十八世紀』慶應義塾大学出版会 2001年7月

## 編 集

1. *English Memoirs Series*, 12 vols. (共編) 臨川書店 1993年9月
2. *English Literary Periodicals*, 8 vols. 本の友社 1997年4月

## 英語教材

1. 『イギリスの人々』日本放送出版協会 1974年10月
2. W. S. Maugham, *Constant Wife* (共編) 金星堂 1977年12月
3. W. S. Maugham, *Smith* (共編) 北星堂書店 1979年12月
4. W. S. Maugham, *Lady Frederick* 鶴見書店 1989年12月

## 論 文

1. 漱石の Swift 観について 『藝文研究』第22号 1966年11月  
21-38頁
2. 政治家としての Swift 『藝文研究』第25号 1968年3月 218-33頁
3. Swiftと理神論 『英文学研究』第48巻第2号 1972年3月 217-29頁
4. *The Greville Memoirs* について 『藝文研究』第36号 1977年3月  
7-24頁

5. Swift と田園賛美の思想について 『藝文研究』 第 40 号 1980 年  
9 月 127-43 頁
6. 芥川龍之介とイギリスの盗賊たち 『英語青年』 1984 年 6 月号  
114-16 頁
7. 決闘とイギリスの文人たち (1) 『英語青年』 1986 年 4 月号 31-33 頁  
同 (2) 同 1986 年 5 月号 80-82 頁  
同 (3) 同 1986 年 6 月号 131-33 頁  
同 (4) 同 1986 年 7 月号 190-92 頁  
同 (5) 同 1986 年 8 月号 233-35 頁  
同 (6) 同 1986 年 9 月号 288-91 頁  
同 (7) 同 1986 年 10 月号 340-42 頁  
同 (8) 同 1986 年 11 月号 388-90 頁
8. ダービー伯爵家とシェイクスピアの史劇 『英語青年』 1987 年  
10 月号 329-31 頁
9. 漱石と Swift 『文化のモザイク』 緑書房 1989 年 9 月 345-52 頁
10. Fielding, Gibbon, そして Maugham 『藝文研究』 第 58 号 1990  
年 11 月 216-30 頁
11. Swift と Jeremy Collier (1) 『英語青年』 1993 年 1 月号 520-22 頁  
同 (2) 同 1993 年 2 月号 576-78 頁  
同 (3) 同 1993 年 3 月号 624-26 頁
12. 法の前の平等まで 『文学』 第 6 巻第 1 号 1995 年 1 月 162-67 頁
13. Swift と賭事 『アダム・スミスの会報』 第 63 巻 1996 年 2 月  
6-11 頁
14. フランス文学とイギリス演劇 『文学』 第 8 巻第 2 号 1997 年 4 月  
129-39 頁
15. 旅する三人の男たち 『ヨーロッパ世界と旅』 法政大学出版局  
1997 年 6 月 34-72 頁

16. チェスターフィールド卿とジン酒規制法 『文学』 増刊号 1997年  
11月 170-71頁
17. “Two Possible Sources of *The Beggar's Opera*” 『藝文研究』 1997年  
12月 124-30頁
18. *The Beggar's Opera* の制作時期について 『藝文研究』 1998年  
12月 223-37頁
19. 春本作者は弁明する 『文学』 1999年7月 194-201頁

#### 論考／記事／随筆など

1. “Swift’s Religion and Deism” 『英文学研究』 1972年3月  
206-08頁
2. SwiftとGeorge Faulkner 『日本ジョンソン協会会報』 第5号  
1974年10月 2-5頁
3. The Pilesの解釈をめぐって 『日本ジョンソン協会会報』 第6号  
1975年10月 4-6頁
4. Loud Herveyのもうひとつの著作について 『日本ジョンソン協会  
会報』 第7号 1977年5月 14-15頁
5. ユーモアと国民性 『泉』 第16号 1977年5月 22-26頁
6. スウィフトとトーランド 『日本18世紀学会ニュース』 第7号  
1981年9月 4-12頁
7. 『十二夜』と決闘の慣習について 劇団「昴」公演プログラム  
1987年5月 20-22頁
8. 絞首台と18世紀の文人たち 『學鐙』 1987年9月号 20-23頁
9. 『危険な戯れ』のアマンダについて 地人会公演プログラム  
1987年10月 7-8頁
10. デーヴィス版スウィフト散文全集について 『英語青年』 1988年  
5月号 67頁

11. イギリス文人とキリスト教会 『上田辰之助著作集』第5巻 月報  
1988年6月 4-8頁
12. シェリダンとフランス革命 『三色旗』 1989年10月 15-17頁
13. スウィフト作品の翻訳について 『三色旗』 1990年8月 15-18頁
14. モームの小説『劇場』をめぐって 「俳優座」公演プログラム  
1990年8月 7-9頁
15. チェスターフィールド卿と演劇検閲法 『文学』第2巻第2号  
1991年4月 186-97頁
16. 賭事と18世紀 『日本ジョンソン協会会報』第15号 1991年5月  
5-8頁
17. 諷刺再考 『日本ジョンソン協会会報』第16号 1992年5月  
39-40頁
18. 思い出のサリンジャー 『三田評論』 1992年11月 66-69頁
19. Swiftと賭事 『日本ジョンソン協会会報』第17号 1993年5月  
24-27頁
20. 政治家としての14世ダービー伯爵 『月刊百科』1993年6月号  
40-41頁
21. 『ファニー・ヒル』と表現の自由をめぐって 『ファニー・ヒル』  
ちくま文庫 1994年6月 335-56頁
22. マリヴォーとゴールドスミス 『三色旗』 1996年4月 33-36頁
23. 『メアリ・ライリー』について 『メアリ・ライリー』文春文庫  
1996年9月 316-25頁
24. 「R.L. スティーヴンスンの生涯」前編・後編（監修）NHK教育  
テレビ 1996年5月
25. 『十二夜』とマルヴォーリョー 劇団「昴」公演プログラム  
1997年6月 14-15頁
26. 「ガリヴァ旅行記」（監修）NHK教育テレビ 1997年7月

27. レマルクと空腹 『味の味』 1997年7月号 18-19頁
28. ダイアナ元王太子妃の実家とは 『月刊百科』 1998年2月号 16-21頁
29. 理想の酒場 『醸界春秋』 1998年11月 40-41頁
30. 17世紀イギリス市民の食生活—ピープス氏の日記から— 『味の味』 1999年5月号 18-19頁
31. 英小説勃興期の性表現 『週刊朝日百科』 1999年8月 150-51頁

## 書 評

1. *The Fictions of Satire* について 『日本ジョンソン協会会報』 第2号 1968年10月 22-23頁
2. “A Straight Look at Swift,” *Scriblerian* Vol. IV, No.2 Spring 1972 60-61頁
3. 『キャッチフレーズ辞典』 『學鐙』 1977年10月 63頁
4. *The Novels of Smollett* について 『英文学研究』 第55巻第1号 1978年9月 100-05頁
5. 『ポオの生涯と作品』 について 『英語青年』 1982年9月号 389頁
6. 『Swift断想』 『英文学研究』 第62巻第2号 1985年12月 348-52頁
7. *Swift vs. Mainwaring* について 『英文学研究』 第63巻第2号 1986年12月 345-49頁
8. 文学理論家と一読者 『三田文学』 第14号 1988年8月 196-200頁
9. 啓蒙期の知られざる性の世界 『學鐙』 1988年8月号 60-61頁
10. イギリス諷刺詩の歩み 『英語青年』 1989年5月号 89-90頁
11. 通説への挑戦 『英語青年』 1990年3月号 611-12頁
12. 『野蠻の博物誌』 『日本18世紀学会年報』 第5号 1990年6月 37-39頁
13. 青鞥派とは何か 『英語青年』 1991年1月号 534頁
14. 嘆きのエドナ 『三田文学』 第28号 1992年2月 196-97頁

15. 東欧を捏造する 『學鐙』 1995年5月号 66-67頁
16. *Swift's Politics* について 『日本18世紀学会年報』 第10号 1995年7月 32-34頁
17. 『イギリス諷刺文学の系譜』 について 『日本18世紀学会年報』 第12号 1997年 43-44頁
18. *Prison Writing in 20th-Century America* 『學鐙』 1999年9月号 52-53頁

### 口頭発表

1. Swiftと理神論 日本英文学会 1970年5月
2. センチメンタリズムの芽生えについて 日本ジョンソン協会  
1970年5月
3. *Roderick Random* について 日本英文学会 1974年5月
4. SwiftとToland 日本18世紀学会 1981年6月
5. 『乞食オペラ』 執筆の動機について 日本英文学会 1994年5月
6. Swiftと賭事 アダム・スミスの会 1995年7月
7. オーガスタン諷刺における“もじり”様式 (シンポジウム講師)  
日本英文学会 1998年5月
8. SwiftとJacobitism (シンポジウム講師) 日本ジョンソン協会  
1999年5月

### 翻訳

1. サー・ヘンリー・テラー 『政治家の条件』 至誠堂 1967年5月
2. ヘンリー・ウィリアムスン 『鮭サラ』 至誠堂 1968年7月
3. ジョン・トーランド 「神秘的でないキリスト教」 『キリスト教教育  
宝典』 玉川大学出版 1969年8月 178-268頁
4. リチャード・ライト 『白人よ聞け』 (共訳) 小川出版 1969年

- 11月 119-93頁
5. ポール・ポルズ「あなたはわたしではない」『海』1970年1月号 194-204頁
  6. 『現代アメリカ短篇選集』第1巻（共訳）白水社 1970年6月9-27, 59-84, 109-22頁
  7. エコロジスト誌編『人類に明日はあるか』（共訳）時事通信社 1972年
  8. ジョン・ウォルシュ『名探偵ポオ氏』草思社 1980年5月
  9. D.S.ブルーア「近代の成立」『三田評論』1982年10月号 33-44頁
  10. マリオン・ジョンソン『ボルジア家』中央公論社 1984年11月
  11. ロバート・ダーントン『猫の大虐殺』（共訳）岩波書店 1986年10月 3-239頁
  12. ロバート・ダーントン「フランス革命はなぜ革命的だったのか」『ヘルメス』第20号 1989年7月 125-36頁
  13. 『スウィフト政治・宗教論集』（共訳）法政大学出版局 1989年9月 215-479頁  
(1990年 第26回日本翻訳出版文化賞。ただし受賞は出版社)
  14. クリステイーン・エックストローム他『海と陸が会おうところ』岩波書店 1992年3月
  15. イアン・ハミルトン『サリンジャーをつかまえて』文藝春秋 1992年5月
  16. J. J. バグリー『ダービー伯爵の英国史』平凡社 1993年1月
  17. ジョン・ゲイ『乞食オペラ』法政大学出版局 1993年8月
  18. ロバート・ダーントン『歴史の白昼夢』（共訳）河出書房新社 1994年8月 9-134頁
  19. R. L. スティーヴンスン『ジーキル博士とハイド氏』岩波文庫 1994年11月

20. ロイ・ポーター 『ギボン』 (共訳) 法政大学出版局 1995年8月  
60-136頁
21. R. L. スティーヴンソン 『バラントレーの若殿』 岩波文庫  
1996年4月
22. ヘンリー・ウィリアムスン 『かわうそタルカ』 文藝春秋  
1996年11月
23. ジャック・ロンドン 『荒野の呼び声』 岩波文庫 1997年12月
24. 『インタヴューズ』 I (共訳) 文藝春秋 1998年11月 106-09,  
221-28, 355-67頁
25. 『サミュエル・ピープスの日記』 第8巻 (共訳) 国文社 1999年  
5月 373-629頁
26. R. L. スティーヴンソン 『宝島』 岩波少年文庫 2002年10月
27. サマセット・モーム 『夫が多すぎて』 岩波文庫 2001年12月
28. 『サミュエル・ピープスの日記』 第9巻 (共訳) 国文社  
2003年3月
29. 『サミュエル・ピープスの日記』 第10巻 (共訳) 国文社  
(2004年刊行予定)
30. ダニエル・デフォー 『ロビンソン・クルーソー』 岩波少年文庫  
(2004年刊行予定)  
(最後の仕事となる。未訳部分は原田範行氏の訳による)



## 学歴・職歴

- 1938年11月 15日、横浜市に生まれる
- 1957年3月 東京都新宿高等学校卒業
- 1958年4月 慶應義塾大学文学部入学
- 1962年3月 同学部（英文学専攻）卒業
- 1962年4月 慶應義塾大学文学研究科修士課程（英文学専攻）入学
- 1964年3月 同課程修了
- 1964年4月 慶應義塾大学文学部（英語担当）助手
- 1969年4月 同学部専任講師
- 1972年4月 同学部助教授
- 1972年8月 英国ケンブリッジ大学に留学（1973年12月まで）
- 1979年4月 慶應義塾大学文学部教授
- 1998年4月 慶應義塾大学大学院文学研究科委員
- 2003年4月 12日、永眠、享年64

## 学会役員

- 日本ジョンソン協会 総務委員 1980-84年
- 日本18世紀学会 幹事 1991-98年

## 学外委員

- 日本学術振興会 専門委員 1990-93年
- 同 特別研究員等審査委員 1991-93年
- 学位授与機構審査会 専門委員 1992-99年3月

## 海保眞夫君を送る

山本 晶

ひとに等しくおとずれる運命<sup>さだめ</sup>については、むかしからさまざまなかたちで、繰り返し説かれています。たとえば、伊勢物語の最終段には、「つひにゆく道とはかねて聞きしかど」とあります。

そう、「つひにゆく道」なのです。これは大和物語にも引かれております。他方、古今集に「病して弱くなりける時、詠める」としても出ています。業平の辞世の歌とされており、惻惻として万人の胸をうつ作であります<sup>かみ</sup>。上の句で、ひとは皆あの世にゆくさだめである、と述懐しているわけですが、そんなことは他人様<sup>ひとさま</sup>から示されずとも、だれもが承知しているところでありましょう。

もちろん、承知してはいるのですが、やはり同じ歌の下の句で結ぶように、「きのふけふとは思はざりしを」と嘆くのが常なのであります。——「つひにゆく道とはかねて聞きしかど きのふけふとは思はざりしを」

海保眞夫君、あなたは余りにも早く逝ってしまった。余りにも早く、逝ってしまいました。

ほんとうに残念でならない。ほんとうに、残念でなりません。

海保君、ほかならぬ、あなた自身が、ここ数年の病と闘う、つらい経験について、なぜ自分がよりによって、こういう目にあうのだろうか、と述懐していましたね。

これをしも「ヨブの嘆き」というのでしょうか。あれほど苛酷な試練により、信仰の強さを試されたヨブは、最後には神に<sup>よみ</sup>嘉せられ、旧に倍して栄えたということですが、あなたのように黙々と精一杯誠実に生きた人に、神はどのように報いてくださるのでしょうか。

信仰心のないわたしとしては、これ以上こちたきことを口にするのは控

えるべきでありましょう。常人には測り知れぬ、この世の不条理がもたらした、としか思えない突然の別離を前に、わたしは取り残されて佇ちつくし、悲しむのみであります。しかも、いずこに向かい、この嘆きを嘆いたらよいのかが分からず、詮ないことと知りながらも、今ここで、このような繰り返言を述べるばかりなのであります。

実は昨年の夏、わたしは三十年あまり住んだところを引き払い、終つひの住みか処と定めたところに移ったのですが、今年の年賀状で数人の方に「あとひとつ居を移すのみ雪となる」と、最近の心境を認めました。のちになって「これがまあ終の住み処か雪五尺」という句が一茶にあったと思い出しましたが、正直に申して、そのときは念頭にありませんでした。

海保君、あなたとは長年にわたる約束事で、何かと打ち明け合い、おのがじし精神のバランスを得てきたのですが、あなたへの便りに自分の駄句を記すことはしませんでした。今度の入院よりいくらかまえのことで、あなたはこの四月に始まる、停年まえ最後の一年に備えて体調を調べ、万全を期しているものとばかり思っていましたから、景気の悪い文面になるのは控えたのでした。

聞くところによれば、あなたは三月三日に緊急入院する前日まで、新しく出す書物の仕上げに専念していたそうですね。およそ五分の四ほどは済ませてあったとか。いかにも勤勉な、あなたらしいよ。

次から次へと書物や論文を出すことで無理をきたしたというよりは、仕事が生き甲斐で、趣味でもあったとさえはため傍目には見えた、あなたの気力をこれまで仕事が支えてきた、と思いたい。

海保君、あなたはその仕事により、十八世紀英文学の研究では、日本にこの人あり、と知られるまでになりました。

顧れば、ふだんは穏やかなあなたが、歴史に残る日本の著名な批評家を、ある時ある雑誌である理由により、一刀のもとに切って捨てた。

『三田文学』では、英国の高名な学者の書物を批評して、ここはこう言え

ば済むものを何でこう小難しく言うのかと、至極真っ当にたしなめた。

あるいは、これまたハイブラウな評論で知られ、新聞雑誌でも人気の高い文壇の長老をまったく信用しないと断言して、わたしを驚かせた。なんとなれば、その人は批評する対象の書物をきちんと読み込んでいないからだ、あなたは言っていました。

そういうあなたが最近上梓した、『文人たちのイギリス十八世紀』という書物の書評を『英語青年』に書いた学者は、冒頭あなたのことを、この人は十八世紀英文学の研究者のあいだではいささか恐れられている人である、と述べていました。

研究対象の書物はすべて、英語でもフランス語でも、きちんと読んでいたからです。そういうことが難なく出来るあなたに、だれしもめったなことは言えなかったからでありましょう。これはそのとき評者があなたに捧げた最高の、かつもっとも妥当なオマージュでありました。

そういうわたしも、かつて同じ雑誌が、これまで日本が産み出した最高の英米文学研究は何かという、面白い特集を組んだとき、あなたが発表したある論文を取り上げて、漱石以来の英文学研究が到達した極北である、とまで言って賞揚しました。

海保君、あなたの教え子から日本英文学会新人賞の受賞者が出ましたから、あなたは研究者としてのみならず、教育者としても立派に任務を果たしたのです。今わたしは「教え子」なる言葉を敢えて使いましたが、あなたはこの言葉を親子関係のようだからと言って、嫌っていましたね。あくまで学生の独立の人格を信じ、かつ求めんとする、謙虚で厳しい、あなたらしい考えでした。

旧臘わたしは、あなたが好きだった漱石や同時代作家の、原稿や書画を集めた美しい展覧会目録を二点、古書店で次々に見つけました。あなたが健康を回復したら、お宅に遊びに行き進呈し、いろいろ話し合おうと楽しみにしていたのです。

海保君、今それは奥様に預けてありますので、お許しがあならば、あなたに転居先へと持って行っていただきたいと希望しています。どうか仕事から解放されて、ゆっくりと楽しんでごらんください。

「あとひとつ居を移すのみ雪となる」と詠んだわたしも、桜散る季節を迎え、あなたと同じくあと一年で、と言っても二度目の停年となります。そのうち遠からずして、その句のとおりとなりますから待っていてください。もっとも、罰当たりのわたしが、あなたの住むところに行けるかどうか、それがいちばん問題ですが。

海保君、それでは、また会う日まで。しばらく、さようなら。

〔付記〕本稿は、2003年4月15日、東京都千代田区の日本基督教団・富士見町教会で執り行われた葬儀で読んだ弔辞である。喪主は真砂子夫人。お子さんは直子さんと重人君、お孫さんが二人。文中に触れた展覧会目録は、重人君が興味をもって引き継いだと聞く。ここに本稿の採録を光栄とし、編集委員会に感謝の意を表する。